

4. 新約聖書の神理解

新約聖書がその福音の弁明の基礎としているのは、すでに書いたように、初代教会による旧約聖書の解釈こそが真実であるという主張です。そのような解釈はイエスの教えからだけでなく、むしろその死と復活と、さらに勝利の再臨を巡る、終末論的神学思想から生み出されました。^{*1}

旧約聖書において発展して来た偉大な神理解は、当然のことながら、そのまま新約聖書に受け継がれました。それは、後の時代におけるような哲学的、合理的なものではなくて、もっと素直で宗教的な、ユダヤ教の会堂における敬虔の流れをくむものでありました。この神がご自分を、御子の言葉と御子の霊を通して現し、特に「御子によって語られた」(ヘブ 1:2)のです。「神はこの恵みをわたしたちの上にあられさせ、すべての知恵と理解とを与えて、秘められた計画(μυστήριον)をわたしたちに知らせてくださいました。」(エフェ 1:8f) この「秘められた計画」とは、「隠されていたが、今や知らされて理解出来るようになり、宣べ伝えられている神の知恵」です(エフェ 3:5-9、1コリ 2:1,7)。

新約聖書の神観は未だ哲学以前のものであり、形而上学的思考は後の時代のものであって、ただ可能性としてその方向性を持ち始めていたと言うことが出来ます。使徒パウロは「わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父」(エフェ 1:17)と呼び、さらにヨハネ福音書になるとさらにもう一步先へ進みます。「いまだかつて、神を見た者はいない。父の心とところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」(1:18) 後に教会は、このような記述と聖書における唯一神の啓示を調和させるために、三位一体論という定義を迫られることとなります。

唯一神信仰が聖書を貫いていることは明らかですが、その初期の形である 申 6:4 においてはおそらく、我らイスラエルにとってはヤーウェだけが唯一の主であるという意味でした。しかしやがて時代が進み、特に第二イザヤ以降それは、他に神はいないという意味で語られるようになり、新約聖書の神観もそれを受け継いでいます。

しかしそれは決して、旧約の預言者たちにとっても、古代のユダヤ教にとっても、そして原始教会にとっても、神がひとりぼっちで天に住んでおられるという意味で理解されたものではありませんでした。そこには天使たちがおり、サタンがおり、「かの空中に勢力を持つ者」(エフェ 2:2) がいるのです。しかし、「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」(ヨハ 16:33) 唯一の神の支配はいささかも揺らぐことはないのであって、新約聖書の神観に二元論の要素が含まれているということではありません。

イエスの教えにおいても、初期のキリスト教思想においても、神は父であります。御子を通して啓示と贖いが与えられました。そしてさらに、御子は世の終わりまで教会と共におられます。聖霊なる神は教会と共に働いてその力を示し、終末の希望である御国を保証してくださいます。

これが初代教会が体験し解釈した神理解でありました。やがてそれが三位一体の教理へと発展したのは、古代教会が当時の世界の多元論的傾向に対抗して、神の唯一性という基本的信仰を守り維持するための必要に迫られたからでありました。そしてそれ以降現代に至るまで、教会の信仰を守る最も基本的な教理であり続けているのです。

初代教会の聖霊理解は終末論的なもの、つまり終わりの時が近づいた、あるいは明け初めたことと結びついていました。「わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」(マタ 12:28) パウロの言う「神の霊に従って歩む」(ロマ 8:4) という教えも、終末の日の復活を目指しています。

終末論、つまり来るべき神の国の教理は、新約聖書の神理解に密接に結びついているのです。ですから、その時代の諸々の思想、すなわちキリストの、救いの、教会と典礼その他の理解はすべて、この終末論的視点から論じられなければなりません。そしてそのためには、私たちはもう一度新約聖書が登場したあの時代の、「神の約束は、ことごとくこの方において“然り” となったからです」(II コリ 1:20) という、素直で活き活きとした信仰と敬虔を思い起こす必要があります。

新約聖書においては、人間の知的満足のための考察ではなくて、ただ活き活きとした信仰体験からの神理解、救済史理解だけが語られているからです。

三位一体論という教理が先ず存在して、そのような教理に基づいてイエスが、また原始教会の使徒たちが語り、その結果新約聖書という原理的な「神学書」が誕生して、キリスト教という宗教の不動の聖典となったかのように錯覚している人たちが、現代の教会の内外にはたくさんいます。しかし、それは完全に間違っているのです。健全な、歴史的批評的研究に基礎をおいた「聖書神学」が、過去半世紀以上にもわたって、教会の現場ではほとんど無視あるいは無理解のまま放置されて来ました。そのことへの反省と、聖書神学という分野への皆様の開眼のために、この講義がいささかでも助けとなることを願っています。

*1 聖書講義(2015年) 2015-3「2. 使徒的宣教の終末論的背景」参照

5. 「神」と「主」

一般に異教の世界では、神々はそれぞれ名前を持っており、中には一人でいくつもの名前を持っている神がいるものです。ところがユダヤ人だけは、彼らの神に名前を付けることを禁じて来ました。

実は、元来のヘブライ語旧約聖書には、いくつかの神名が保存されています。「いと高き神」(創 14:19)、「全能の神」(創 17:1)、そして YHWH(ヤーウェ) などですが、それらが人々に知られていたのは捕囚期以前の時代のことであったようです。ところが、七十人訳と呼ばれるギリシア語訳の聖書(LXX)*1では、神を指す言葉は「セオス(θεός 神)」と「キュリオス(κύριος 主)」の二つだけ(しかもそれは固有名詞ではない)が用いられました。ヘレニズムの世界では当時、「神」という語は抽象的に神的なものを指す言葉でありましたが、LXX はそれをイスラエルの神の訳語に使ったのです。

ヨハネ福音書の冒頭の句、「始めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」を読むとき、私たちはその「神」を抽象的な意味ではなく、イエス・キリストの父である神のことだと理解します。まさにそれが、LXX における「神」という訳語の使い方でありました。

「主」という訳語にはさらに重要な背景があります。この語はヘブライ語の「アドン」に対応するギリシア語で、主、主人、奴隷の所有者などを意味します。ところがこれに語尾が付いて「アドナイ(私の主)」となり、聖なる四文字 YHWH に置き換えられて、恐らく B.C.2 世紀の初め頃には諸会堂でそのように発音されるようになっていました。その結果ユダヤ教においては、YHWH という語の本来の発音もその意味も忘れられてしまったのです。LXX が誕生したとき、そこにはいわゆる神名というものが全く存在せず、「主」という訳語が使われることによって、それは神の唯一性の宣言を意味したのでした。

このことは「神」という訳語にも当てはまります。LXX の冒頭はギリシア語で、「初めに、神は天地を創造された」となっていました。もしヘレニズム世界の常識で言うなら、このような箇所には「初めに、偉大なる神マルドゥックは・・・」、あるいは他の神や神々の名が登場しなければならなかったことでしょう。LXX は YHWH 以外には神がないことを、この訳語によって宣言したのです。

一世紀の異邦人キリスト教会は、離散のユダヤ人から LXX を引き継ぐことによって、そこで用いられている主要な宗教用語をも受け継ぎました。その最たるものが上記の「神」と「主」であります。

その場合、キリスト教信仰と礼拝における「主」である復活と昇天のイエスは、旧約聖書の神である「主」とどのような関係になるのか、それは神の唯一性を損なうことはないのか、聖霊についてはどうなのかという疑問が生まれます。教会の正典となるに至った最終的な新約聖書本文が、もはやそれを意図していないとしても、その形成過程では「神」に対して「主」が従属的なものとして解釈されたように見える痕跡が、使 2:36 には存在します。「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

この問題を解く一つの仮説として、以下のような経過が考えられます。*2

1. イエスは死者の中から復活して父の右の座に着き、天的なメシア、すなわちキリストになった。彼はそこから、生きている者と死んだ者との審判者として、間もなく来られるであろう。そのような方としてイエスは、使徒たちや信者たち初期の礼拝者に「主」と呼ばれた。ところがこの最初期の、パレスチナでのキリスト者共同体はアラム語を話すユダヤ人であったために、彼らはヘブライ語の主(アドナイ)ではなくて、アラム語の主(マル、またはマラン)を使ったに違いない。

このような推測の根拠は、1コリ 16:22 の「マラナ・タ」が、黙 22:20 ではギリシア語に翻訳されて、「主イエスよ、来てください」になっていることです。そしてここでは祈りが直説昇天のキリストに向けられており、従ってまた、イエスが祈りに応えてくださると期待されているわけです。

2. 間もなく教会が異邦人とギリシア語を話すユダヤ人へと広がって行くと、このマルまたはマランがギリシア語に翻訳されてキュリオスになり、LXX におけるアドナイの翻訳語であるキュリオスをキリストと同一視するようになる。すでにパウロがダマスコに(使 9 章)、あるいはアンティオキアに(使 11:19-26)到着する以前に、事はこの段階に達していたと推測されます。いずれにしてもパウロの回心以前に、すでに初期の異邦人教会では昇天のキリストを「主」また「御子」と呼んでいたに違いないのです。

3. 教会の信仰は、初めからキリスト信仰でありました。「この道に従う者」(使 9:2)とはキリスト者、すなわちキリストを礼拝する人々(使 11:26)のことであって、もはや単なるイエスの仲間(マコ 14:69)、ガリラヤの人たち(使 1:11)ではありませんでした。

パウロが考察したキリストと神との関係の叙述の典型は、フィリ 2:5-11 と 1コリ 15:20-28 です。これは厳密な意味での一神論ではありません。しかし、その後の教会の歴史におけるキリスト論論争において退けられた各種の異端を思い起こすなら、それが如何に優れた論証であるかが理解出来ます。

LXX では「神」と「主」が同じ一人の神を指していたのに対して、新約聖書では「主」という称号があるときには父なる神に、他のときには御子キリストに使われるようになり、やがて古代教会では聖霊にも使われるようになります。新約聖書では未だ 11コリ 3:17 にその兆しが見えるだけなのですが。

*1 聖書講義(2015年)2015-2「13. 正典としての聖書」参照

*2 F.C.Grant, *An Introduction to New Testament Thought* (1950), pp.133ff.

6. 「神」と「キリスト」

新約聖書の神理解は、パウロの次の言葉に要約されています。それは、「わたしたちの主イエス・キリストの父である神」(II コリ1:3) です。すなわちイエスが愛し、あがめ、服従した神であり、自ら“父”あるいは“わたしの父”と呼び、弟子たちには“あなたがたの父”である神に“わたしたちの父よ”と祈りなさいと教えた、“そのような神の子、わたしたちの主イエス・キリスト”の父であります。

教会が後に信条によって、三位一体の教理を定義したような形而上学ではありませんでしたが、そのような方向性だけは秘めていたと言ってもよいでしょう。キリストは天地創造の前から父と共におられ、天使たちより優れた者、独特の意味で“御子”であります。新約聖書の著者たちがすでにそのような教理を考えていたわけではありませんが、三位一体の教理は新約聖書の神観の、実に正しい解釈でありました。同様に新約聖書の著者たちは未だ、後のアタナシオス信条のように、“父と子と聖霊の三位において一体が、一体において三位が礼拝される”という神観を述べてはいません。そこではキリストは、父なる神に従属する御子なのです。

原始教会は、ユダヤ教から旧約聖書の神観をただ受け継いだだけではなく、それに新しい強調点と豊かな内容を付け加えました。今や神は世界の創造者、天地の支配者、救済史の主、憐れみ深く恵みに富み赦しを与える方であるだけではなく、「わたしたちの主イエス・キリストの父である神」であります。

神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画が、キリストにおいて使徒たちや指導者たちに明らかにされました。キリストは旧約の啓示の目標(τέλος)であります(ロマ10:4)。神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです(II コリ1:20)。神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました(ヘブ1:1f)。

神は天地創造以来ずっと継続して、御自身を啓示して来られました。そして遂に、そして完璧に、御自身をキリストにおいて啓示されたのです。このキリストにおいて啓示された神と、自然と歴史と預言者たちおよび律法によって啓示されて来た旧約の神とは、同じ方でありました。四世紀の危機的なキリスト論論争に際して、アタナシオスがアリウスに反論して見事に述べたように、創造者なる神と贖い主である神とは同じ一人の神であります。

新約聖書のキリスト論が、その頂点において受肉の教理に至るのは、当然であると言ってよいでしょう(フィリ2:6-8、ロマ8:3、そしてより明確に、ヨハ1:14)。神は、キリストの言葉と教えを通してだけでなくその人格と贖いの御業によって、御自分を示されました(II コリ5:18f)。神は御子によって語られただけではなく、行為されたのです。

“キリストが神を啓示した”のではなく、“神がキリストにおいて御自分を示されました”。“キリストが私たちが神と和解させた”のではなく、“神がキリストを通してわたしたちを御自分と和解させ”(II コリ5:19) たのです。

神がキリストにおいてわたしたちを救い、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。神がキリストにおいて与えてくださった最大のものは、永遠の命です。それは神における、神に向かう命です。それはわたしたちが、神の本性にあずからせていただくようになるためです(II ペト1:4)。

新約聖書の神観は、始めから終わりまで神中心であって、人間中心でないのはもちろんのこと、キリスト中心でもありません。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して」(Iヨハ4:10) くださったのです。人から神への道は、この神への応答です。そしてそこでは、キリストの神に対する真の従順が買われているのです(フィリ2章、Iコリ15章)。

7. 時代遅れのキリスト論

私は昨年の聖書講義で、教会の現場におけるキリスト教理解の「19世紀の名残」について、警鐘を鳴らしておきました。^{*1} 今年の講義でも、再びこの問題を取り上げなければなりません。

愛のイエスを大いに強調して、受肉された神の子という面を曖昧にした、「イエス教」とも呼ぶべきものが、現在も特にファンダメンタルな傾向の教会で盛んなようです。己を低くして兄弟を愛するという、純粋な倫理を教えた“人の子”イエスが、ユダヤ教団の敵意によって死に至らされた。しかし彼は、その後、死者の中から復活したと信じられるようになり、その結果やがて神とされるに至った。この復活の喜ばしい知らせこそが、キリスト教の起源である……というような理解です。

18～19世紀のロマンティズム、およびそれ以前からの敬虔主義から借りて来たイエス理解が、今なお教会の現場では多くの人々に歓迎される傾向があり、そのような人々の間では、贖罪の神学を語るパウロの厳しい福音理解はもちろんのこと、健全な、歴史的批評的研究に基礎をおいた「聖書神学」はほとんど無視あるいは無理解のまま放置されているのです。

しかし、新約聖書はそのようなタイプの敬虔を知りません。新約聖書の初めから終わりまで、そこにあるのはすべて神学的なキリスト理解だけなのです。キリスト教信仰にとっての神学的意味と解釈を離れての、単純なイエスの生涯と教えの記録というものは、聖書には存在していません。もし世俗に生きた純粋な人間イエスの伝記を再構成しようとするなら、それは仮説と想像によるしかないのです。

新約聖書は、一世紀のユダヤ教から発してカトリック教会として成立するに至った、新しい宗教活動の聖典であります。この聖典は、教会の主であり救い主であるイエスの物語りを、伝記としてではなく、福音の宣教として語っています。神がイエス・キリストによって送ってくださった御言葉(使10:36ff)、すなわちガリラヤ伝道から始まってエルサレムにおける死、復活と昇天に至るイエスの出来事が語られ、それに付随して彼の教えや聖書解釈、律法学者たちとの論争などが集められました。そしてこの福音は、終わりの日、すなわちすべての人の復活と神の裁き、そして「新しい世界」(マタ19:28)の完成という終末論的目標に向かって今なお進行中なのです。

ここで過去のプロテスタント神学における間違いの一つを指摘しておきたいと思います。それは宗教改革の要求から発した主張であって、最初の使徒たちの教会が墮落・衰退してカトリック教会の時代が来たというものです。しかし事実は、教会は最初からカトリック教会として成立したのであって、正典としての新約聖書はそのような地盤の上で誕生しました。

このような背景を探ろうとする場合に、退けられねばならないのは、カトリック教会とは別な教会の古典的原型が存在したという仮説と、ユダヤ人キリスト教会というものの影響を考慮することです。後者については僅かに初期の痕跡が知られているとしても、それさえもAD.70年のエルサレム神殿破壊とAD.135年のユダヤ国家消滅によって終わりを告げました。

教会は、異邦人キリスト教の地盤においてローマ帝国を包括するカトリック教会へと展開して行く中で、最終的に新約聖書を編集し、成立させました。

ですから、「イエスの後に従う」(マコ8:34)というような表現も、明らかに神学的な意味で理解されなければなりません。「私を“主よ、主よ”と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」(ルカ6:46)と書かれている「主」は、復活して神の右の座に着いておられる「教会の主(頭)」(エフェ1:20-23)のことだからです。「キリストの愛がわたしたちを駆り立てている」(IIコリ5:14)というのも、人間イエスの愛を理想化して述べているのではなくて、「人間の姿で現れ、へりくだって、十字架の死に至るまで」(フィリ2:7f)、御子を「わたしたちの罪のために死に渡され」(ロマ4:25)た「神の愛」(ヨハ3:16)のことなのです。

19世紀末から20世紀初めにかけて、新約聖書からイエスの生涯の初期の記憶を抽出しようとする研究が盛んに行われた時期がありましたが、それは成功しませんでした。なぜなら私たちは、イエスが歩まれた時代のガリラヤ地方のユダヤ教に関する背景情報を全く知らず、現在私たちの手元にある新約聖書は、初代教会の時代の伝承によって語られ伝えられて来た、神学的理解による宣教的文書であるからです。

しかしその研究の結果として、イエスの物語りを構成している彼の初期の姿の数々の印象が、浮き彫りにされました。それは全く独自の威厳を持った、神の権威をもって語り、行為する人、悪霊を追い出し、嵐を静めるだけでなく、罪をさえ赦す人の子の姿です。

とはいえ、それらを材料にしてイエスの伝記を書くなどという試みを、一世紀の教会も、二世紀三世紀の教会もしませんでした。五世紀の教会にとってもキリストは、歴史の目標(τέλος ロマ10:4)であり、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られる主でありました。19世紀になって、実は初めて、イエスの歴史を復元しようという見当外れな試みと、“イエスに帰れ”という人道主義的な運動という、二つのあだ花(実を結ばない花)が咲いたのでした。

*1 聖書講義 2015-1「2. 19世紀の名残／教導職と信徒のキリスト教理解」

8. 初代教会の福音宣教

しばしば考えられているように、イエスに関する福音書の記録が最初であって、それを基礎にして使徒たちの宣教が後から続いて生まれ、発展して行ったという理解は間違っています。実は、福音書が書かれるまでには、すでにその伝承は一世代、あるいはそれ以上にも亘って受け継がれていて、その間に資料の取舍選択や各種解釈による叙述の検討が加えられ続けていました。教会は福音を宣教するために、イエスに関する諸事実の伝承を用いたのであって、そのような宣教に基づいて解釈されない――単なる事実の報告としての――客観的なイエスの歴史を後世に伝えようなどとは考えなかったのです。

「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」(ヨハ 20:31)

もちろん福音書に集められた諸伝承は、何よりもイエスの事実に最も近かった人々や、それらの事実によって生活や思想に影響を受けた人々の証しを表しています。彼らに共通するものは、使徒的宣教に基づく福音理解と信仰であって、この信仰が福音書だけでなく、新約聖書に集められた諸文書を生み出したのです。

最も早く成立したのがマルコ福音書で、それはパウロとペトロの殉教後間もなくのローマの教会のために、すでにその頃にはある程度(口伝として)定式化してしていた伝承を用いて書かれました。この福音書の主題は使徒的福音の宣教であって、単なる回想録としてのイエスの歴史ではありません。そのことは冒頭の言葉、「神の子イエス・キリストの福音の初め」によって示されています。

続いて書かれたマタイとルカの両福音書は、このマルコ福音書を利用しました。しかしそれらは、注意深い読者なら直ぐ気づくように、その構造と強調点の変化によって、それぞれかなり異なった個性を発揮しています。ヨハネ福音書は明らかにそれらとは別な独立の文書です。そこで用いられている伝承は、共観福音書に描かれているものに似ているだけで、イエスが語られた教えの内容は大きく異なっています。

マタイ福音書は、イエスを新しい律法の授与者として理解し、イエスの教えの大集成を系統的な叙述として加えました。それは贖われた神の民である教会が、歴史的集団として組織されて行くための導きであります。「(世の終わりまで)、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」(28:20)

ルカ福音書におけるイエスは、良い教師で人間の友、わけても律法なき人々を愛する者として、キリスト教的行為の理想として人道的に表現され、普通人の感情に訴えるように描かれています。

ヨハネ福音書は、神の知識と永遠の命はキリストにつながっている人々に与えられると教えます。「永遠の命とは唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」(17:3) 「わたしにつながっていなさい。」(15章) キリストにつながっているとは、その友のために自分の命を捨てる(15:13)彼の愛の対象となることであり、その代わりに彼を愛し(14:23f)、彼に属するすべての人を愛すること(13:34, 15:12)なのです。

このように、私たちは初代教会の宣教によって解釈されていない、単なる事実としてのイエスの教えやその生涯の原歴史を、福音書から再現することは出来ないのです。四福音書や新約聖書全体の中からイエスに関するすべての情報を集めて、それを公分母にして、これが史的イエスの実像であるなどと言うことは、幻想に過ぎません。私たちが現代の感覚でイエスの時代に帰って、現代的な先入観を聖書の世界に持ち込み、イエスはこういう意味で発言し行動したはずだとか、聖書の記事の真意はこういうことだったのだと、もっともらしく解き明かすことほど馬鹿げたことはありません。

聖職者であれ信徒であれ、聖書を解釈することにはいつも、それが見当外れな「異なったイエスを宣べ伝え、違った福音を説く」(II コリ 11:4, ガラ 1:4) ことになる危険を伴うことに、十分注意すべきです。

しかし私たちは現代の聖書神学の進歩のおかげで、もし細心の注意を払って研究するならば、このような初代教会の証人たちがイエスの生涯と出来事をどのように理解し解釈したかを、つまりこれがキリスト教だと言える初代教会の宣教の内容を、確実に新約聖書から学び取ることが出来ることを感謝しましょう。

9. 聖書神学の課題

新約聖書を学ぶときに私たちが会おう一つの困難は、現代世界の社会的経済的また政治的様相が、新約聖書の時代とは全く異なっているということです。現代世界は、貧困の撲滅や格差の解消によって、すべての人が豊かに生活出来ることを目標にしています。しかし古代の世界においては、飢饉や欠乏は日常茶飯事であって、しかもそれらは直説神の意志から来ることでであると理解されていました。つまり宗教的背景がまるで違っていたのです。ですから私たちは自らの想像力によってそのような時代背景を心に思い描いて、聖書を解釈しなければならないのです。そしてそれを越えてイエスの教えを現代に適用しようとする場合には、文字にではなく、イエスの霊の導きに従う必要があります(II コリ3:4-16)。現代のファンダメンタリズム(福音派あるいは原理主義)と社会活動や政治活動との結びつきが、即そのままキリスト教ではないのです。

現代の私たちは、新約聖書が成立した時代の世界観と、その時代の霊的感覚の上に立った信仰に対する共感と想像力をもって、その記述を解釈しなければなりません。そして、もし私たちがキリスト教徒であると主張するのであれば、現代の変化した世界に至るまで継続して今も働いておられる神の導きのもとで、聖書神学に取り組むべきであります。

神のキリストにおける御業は、聖書に記録されている以上に偉大な出来事でありました。聖書によって伝えられた伝承は、いわばその一部、つまり断片に過ぎません。最初の福音の証人たちは、現代ではなくて、彼らの時代に利用可能な範疇や概念を用いて解釈し、宣教したのです。そして新約聖書の諸文書が成文化されるまでには長い経過があって、その間にさらに解釈と理解の進展がありました。

かつてのナザレのイエスは、今や復活して神の右の座に着き、その教会と交わりを持ち、聖霊を通してなお語ってくださっていると、初代教会は主張しました(黙2-3章参照)。つまりイエスについての伝承は、ガリラヤやエルサレムの神殿や、そして道すがら話された教えだけではなくて、復活の主の言葉をも含むものであることに、私たちは留意しなければなりません。それはナザレのイエスの伝承であるだけではなくて、教会と世界の主となられたキリストについての伝承なのです。

新約聖書におけるキリスト論は、原始教会の福音宣教の線に沿って発展して行きましたが、しかしそれはいつも体験のキリストを背景として語られました。この体験のキリストとは、(1) 歴史上のナザレのイエス、(2) 栄光に入られた主、またメシア、すなわち原始教会における礼拝の対象、(3) 旧約聖書で預言されていたが、歴史のイエスとして到来されたメシア、であります。

それは終末論的な意味でのメシアであって、「神は、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」(ヘブ1:2)、救済史の目標(終わり、完成 *τέλος* ロマ10:4)として「神はキリストによって世を御自分と和解させ」(II コリ5:19)た、というキリスト論です。

ですから、父の独り子としてのキリストは唯一であって、その後の歴史の各時代に應じて次々と登場する神的メシアの一人でないのは当然のことです。第二のキリスト、現代の救済者などというものを想定することは、聖書神学においては全くナンセンスなことです。

「神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。」(ヘブ1:2)「わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。」(I コリ8:6)

「われわれの主イエス・キリストの栄えある再臨までは、もはやいかなる新しい公的啓示も期待すべきではない。」(神の啓示に関する教義憲章4)

現代の私たちにとって大切なことは、新約聖書の中心主題である原始教会の福音宣教を正しく理解することです。この「宣教」を理解せずに、自分の現代的感覚で聖書を読み、感覚的にぴったり合う若干の章句を選び出して、これこそ新約聖書の語っている真理なのだとか主張することは、必ずしも「福音を説く」ことにはならないのです。

今から80年ほど前のある講演で、C.H.Doddが述べた有名な言葉を、紹介しておきましょう。

「近代的の心に少しもじっくりしない表現形式の中で、原始キリスト教の福音に直面する訓練を受けた結果として、わたしたちは福音ばかりでなく、わたしたち自身の先入観も、今一度考え直さねばならない。」